



日本一の旅館だよ、母さん。

石川県の片山津にある加那屋に到着して、父さんが最初にしたことは、かばんから母さんの遺影をとりだすことだった。家族みんなが同じ部屋で眠れるようにと、俺が予約したデラックスルームは、予想していたよりずっと広く、部屋からは真下に日本海の水平線が眺められるのだった。

「みんな母さんが好きだった」

俺は口にこそださなかったものの、母さんの遺影を眺めながら思った。

「でも、わたしたちがこうやって家族で団結しているのって、母さんがいつも笑ってわたしたちのまんなかにいるからだよ」

姉ちゃんは俺が思っていたことを、そのまま口にだしてくれた。妻は甥っ子と息子をつれて「館内を冒険してくる」といって、迷宮のような旅館内に散策にでていたが、父さんと姉ちゃん、そして俺、の三人だけにしてくれたのだろう。

母さんの死から12年。この12年間、遺影のなかで、笑顔を見せて俺たち家族を支えてくれた母さんだが、俺は生きている母さんが笑顔だったときのことを、なぜか思い出せない。

「生きていた母さんにも、この景色をみせてあげたかったよ」

俺がぼそぼそと呟くと、父さんがすかさず言った。

「いや、おまえが母さん母さんと、いまでも母さんを大切に思ってくれたり、わしや姉ちゃんをつれて、こんな立派な旅館をとってくれるのも、母さんが天国にいるからだと思うんだな。天国ってすごいところなんだぞ」

母の死の直後はユウモアや冗談のひとつも言わなくなっていた父さんは、あれから12年たって、よく笑い、よく話す、楽しい爺さんになっていた。

「ほんとね、父さんのいうとおりよ。今の30代なんて、普通、みんな自分たちのことしか考えないものよ。家のローンだとか子供の学費だとかで、親に会うのは正月くらい。それが今の日本の常識なのよ。もし母さんが、生きていたとしたら、あんたってアノ当時のままの生意気な30

代だったと思うなあ」

姉さんがお茶をいれながら、言った。

そうしていると、妻と息子、それに甥っ子が帰ってきて、子供たちは「はやく温泉にいこう」と俺たちをせかしたので、みんなで館内の大温泉へ足を運んだ。

温泉から帰ってくると、部屋の内側から俺が大好きなカニのダシの匂いがして、テーブルのうえには、茹でたてのボイルしたカニの半身や、濃厚なカニミソ、それに肉のように分厚いブリの刺身が豪勢にもられたブリしゃぶ用の鍋がおいてあった。

「ホクホクだね」

「あなた、真っ赤なカニの身がぎっしりだわ」

母の遺影がおかれた母の席にも料理がならんである。

「母さん、カニさめちゃうからもうよ」

俺がそういって、母さんの料理のボイルガニのむき身をとると、姉ちゃんもすかさず「あんた、ずるい」といってカニミソをとった。食べ物のとりあいをするなんて、子供のころに戻ったみたいな気がしたが、本当に母さんがいるような気がする。そして、俺と姉ちゃんも子供で、妻も息子も、甥っこもみんな子供で、父さんだけが、唯一、親父のままでいるのだった。

俺たちはその晩、カニのとりあいをしながら徐々に自分たちが母さんとすごしたころの話をはじめた。父さんは初めてデートしたときの若かりし母さんの思い出や、酒がはいったためか、突然「母さん、ありがとう！」と大声をだしたりした。

姉さんは、はじめてスキーをしたときの母のすべりの上手さについて、ほれぼれと語った。

「母さんは手がきれいだった。わたしの手もきれいなんだけどね」

姉は自分の手をのばしながら、

「子供を育てるって大変なのよー」

と笑顔でいいながら、姉さんの息子である甥っ子の頭を撫でて、もう一度、「かあさんの手は

きれいだったなあ。あたたかくて」と言った。みんな笑っていた。

妻は「わたしもお母さんにお会いしたかったな。私も自分の母になんだか電話のひとつもしなくちゃって思ってきました」と微笑みながら話しているというのに、妻はいつのまにか泣いていて、

「すごくこの空気があったかくて……ごめんなさい」

と妻が大泣きしたので、姉ちゃんは、まるで娘をあやすように妻の髪をなでていた。

「淳平、仕事のほうはどうなんだい。こうして立派になったんだから。ちゃんと母さんにも報告しなさい」

父さんが泣いている妻の手前、少し硬い話題をもちだしたので、俺は道路にまつわる専門用語をつかった話をしているうちに、甥っ子や息子は飽きてきたのか、「冒険にいつてくる」と言い出し、妻と姉さんは「エステにいかなくちゃ」とそそくさとエステサロンへ行ってしまって、男二人が残された。

久しぶりに父さんと二人で話すなあ、と俺が父さんを見ると、父さんは今日本当に充実していたのか、座布団を枕に眠り込んでいた。それで、俺も一人で呑みにでもいこうと思って、館内のバーへ行ったのだった。

バーのカウンターで一人で飲んでいるのも悪くなかった。カウンターに、ゴッホの「星月夜」のレプリカが飾ってあって、この絵をはじめてみたころは、「なんて、病んでいる絵なんだろう」と俺は思ったものだった。そして、病んでいる絵なのにどうしてこんなに俺の内面に食い込んでくるんだろう、と、そのころ、いつもコピーしたこの絵を手帳に挟んでは繰り返し眺めていたのだ。

社会人となり、仕事が忙しくなるにつれて、あんなに生きることの苦しさしか感じられなかったのが、気がつけば生きることが働くことになって、毎日働いていると、いつのまにか苦しさだとか過去のトラウマというものも、まるで他人の話のように遠くなっていく。

俺は、いつのまにか手帳からなくなっていたゴッホ「星月夜」を加那屋のバーでひさしぶりにみつけたことに、なんだか乾杯したくなって、杯を重ねていた。そうしているうちに、後ろの席から若い男が大きな声で話をしていて、その内容が聞くつもりがなくても聞こえてくる。俺は、心地よい酔いのなかにおいて、その顔のみえない背後の若者の語りを聞くことにした。

「やっぱ、俺やろ？」

「ほんまやな、やっぱ、あんたしかおらへんわ」

若者は彼女を連れているようだった。今は関東で仕事をしている俺にとって、関西弁のひびきもそうだが、どこかこの会話の空気にもものすごい懐かしさを感じる。

「あんなあ、はじめてスノボしたとき思ってん。このな、山の上から下までを、転ばへんまま、すべりきってみたいって」

「うんうん」

「不思議やってん。車は道路をまっすぐに進んでいくやろ？ けどな、スノボは、横向きにすすんでいくねん。横向きに前進していくって、なんかかっこいいやん？」

「あんたみたいや」

「そう思ってん。スノボといえは、やっぱ俺やろ？」

若い恋人たちの会話をきいていたら、俺はずいぶんボードに乗っていないことに気づいた。母さんが生きていたときの笑った顔を思い出せなかった俺だが、そういえば、ゲレンデにくると、母さんはいつも笑っていた。そうだ。遺影の笑顔の一枚は、はじめて家族でゲレンデちかくの宿にとまった日に撮った一枚だった。

「すべってると、いろいろ忘れられるから好きやわ」

後ろから聞こえるさきほどの若い女の声が、なぜか母さんの声にもきこえる。母さんも同じようなことを言ったことがあった。それに、俺自身、スキーやスノーボードをしているあいだ、何かを考えたりしていない。感じるだけだ。

「スノボしてるとき、そやなあ、感じるしかないやろ。考えとったら、こけるやん」

「あたし、いつもこけるのんは、考え事してるから？」

「こけるときはな、顔からこけなあかんで」

「でも痛いやん」

「そやなあ、おまえまたスノーパウダーしらへんか」

「なにそれ」

「あれはなあ、ほんま……きれいやねん」

俺はとっさに、この男が俺だと思って後ろをふりむいた。だが、振り返ると誰もいない。

「すみません」

「はい」

俺はバーテンダーにきいた。たったいま、俺のうしろに関西弁をしゃべる仲良さそうなカップルがいましたよね、と。だが、バーテンダーは

「そうですね、私の目には見えませんし、聴こえませんが、お客様だけにみえる姿や声というのが、あるかもしれませんね」

俺は何度もふりかえって見たが、カップルどころかこの店内にいるのは俺とバーテンダーだけだった。バーテンダーが俺を酔っぱらい扱いせず、謎めいた言い回しをしてくれたのがちょっとうれしかった。だが、たしかに俺は若いスノーボーダーの語りをきいていたのだ。そして、それは……俺の若いころにそっくりなことを話していた。

「やっぱ、俺やろ」

仕事を始めると人間が謙虚に、堅実になっていくが、俺は昔、自分ならなんでも出来ると思っていたものだ。当時の自分の口癖のことも長いあいだ忘れてしまっていたが、「やっぱ、俺やろ」と心のなかで小さく呟いてみただけで、パウダースノーの斜面を一気にすべりおりていくときの、あの風を切っていく自分を思い出した。本当にあれは風を切るとしかたとえられない。

「お客様」

不意にバーテンダーから話しかけられた。

「当店は、通常はジャズをかけているのですが、ただいまお客様おひとりということで、私の個人的なおすすめの一曲をかけてもよろしいでしょうか」

「ええ」

Tune up radio

風に揺られ流れるStereo

肩で刻む軽快なRhythm

想いをのっけて届けるよRhyme

よく晴れた空の真下

僕らは遥かな未来目指しました

.....Dragon AshのGrateful Daysだった。

スノーボーダーとしての俺が一番聴いていた曲である。

「やっば、淳平やろ！」

「まじ？ まじで、タケヤンか」

バーテンダーはいつのまにか制服から私服にきがえて俺の隣にすわって声をかけてきたかと思うと、よくよくみればその顔は、昔にスノーボードの合宿であって、その当時はいつもつるんでいた昔のボード友達だった。

「淳平、すべってへんやろ？」

「ほんま、すべってへん」

「またいかへんか」

「子供と嫁さんおるからな」

「俺もやで」

「まじで？ナンパしてるんちゃうん？」

「なにゆうてんの、今はゲレンデって子供ばかりやで。淳平の家族つれてこいや」

「ええなあ！」

「サティスファクションやろ！」

俺は、タケヤンと連絡先を交換してバーを出て、部屋にもどった。部屋にもどると、布団が敷

いてあって、父さんは寝ていたが、姉さんと妻は顔をほんのりと赤めながら飲み続けていて、息子たちはトランプをしている。

「みんな、明日は、スノボやるで！」

母が亡くなって関東に移り、いつのまにか皆が母の死とともに関西弁をやめてしまっていたのが、嘘のように、淳平が自然にしゃべりだした関西弁につられて姉さんが

「ほんまに？」

と言った。寝ている父さんも、「わしもいくで」と目をあけていった。妻はもう泣いてなく、「どうしてみんな急に関西弁なの？」と目を丸くしていた。